「三河港 eyeQ カルタ」による
未来に向けた港の応援団づくり
～若手職員による参加型広報の展開～

岩月優太[1]・舟波里紗[2]・青山万丈[3]・深谷知央[4]

[1]三河港湾事務所 工務課（〒441-8075 豊橋市神野ふ頭町 1 番地 1）
[2]港湾空港部　港湾管理課（〒460-8517 名古屋市中区丸の内 2-1-36）
[3]港湾空港技術研究所　地震防災研究領域　耐震構造研究グループ
（〒239-0826 横須賀市長瀬 3 丁目 1 番 1 号）
[4] 豊橋市　産業部　みなと振興課（豊橋市神野ふ頭町）

文部科学省は，小学校第 5 学年で，貿易・運輸について知識や判断力を養うことを目的として学習を行うよう指導している．三河港湾事務所と豊橋市では，児童の教育段階に合わせ三河港の効果的な広報を行うため，小学校中高学年を対象とし，物流，港湾施設，海岸防災，海洋環境にかかわるコンテンツ 44 種からなる「三河港 eyeQ カルタ」を作成した．同カルタで遊ぶことで，児童は楽しみながら港湾の知識を得ることができた．また総合学習の単元では，工事学習会と併用することで，港に関する知識の定着と理解を促すことができるとの評価を得た．

キーワード：参加型広報，児童，港湾，三河港

１．はじめに

天然資源に乏しく貿易立国である我が国にとって食料・資源エネルギーの輸入，加工品の輸出など豊かな国民生活を営む上で，港湾は必須の社会資本である．港湾の開発や運営に要する社会的なコストに対して享受される便益に関する国民への理解向上が求められている．しかし，港湾のこうした社会的意義について教育の場でも十分な時間をかけて教えられる機会が少ないのが実情である．

これまで三河港湾事務所の広報は，幅広い市民層を対象として，パンフレットの配布物やパネルの展示など一方的に説明するものであった．広報意図が相手に十分に伝わっているか不明であった．特に，夏祭りや海の日のイベントでは児童が参加するが，効果的な広報ができているか疑問であった．

他方，文部科学省小学校学習指導要領では，小学校第 5 学年になると，貿易・運輸について知識や判断力を養うことを目的として学習を行うよう指導している[1)]．著者らは，学校教育と連携することにより，児童の教育段階に合わせ効果的な広報が行えるようになり，ひいては高い教育効果を生み出すことができるのではと考えた．地元の豊橋市役所と連携し，児童の目線に一番近い若手職員 4 名からなるプロジェクトチームを結成し，小学校中高学年を中心とした児童が楽しく学べる参加型の広報を企画した．

本稿では，まず第 2 章で，小学校中高学年の児童向けの広報戦略，広報資料としてカルタを選定した経緯を紹介する．第 3 章では，カルタを活用した児童への広報活動を紹介する．第 4 章では，広報活動による効果をとりまとめる．最後に，今後のカルタを用いた広報活動の改善点を整理する．

２．児童向けの新たな広報戦略

(1) プロジェクトチームの発足

新たな広報企画の検討にあたって，事務所 3 名と地元豊橋市役所 1 名の若手職員 4 名によるプロジェクトチームを令和元（2019）年 4 月に立ち上げた．毎年 7 月の国民の祝日である「海の日」に豊橋市主催で行われている「豊橋みなとフェスティバル」での広報を目標に諸々の検討や準備を進めることとした．

(2) 広報戦略の構築

まず広報対象は，小学校中高学年の児童とする．楽しみながら港に関する知識を得ること．またイベントを通じて，

港に関するモノを見たり，触れたりすることで，得られた知識が定着できるように心掛けた．

文部科学省の小学校学習指導要領によると，第5学年社会科において以下の指導を求めている[1)]．

「交通網の広がり，外国との関わりなどに着目して，貿易や運輸の様子を捉え，それらの役割を考え，表現すること．交通網の広がりに着目するとは，原材料の確保や製品の出荷のための高速道路や鉄道，航路などの交通網，陸運や海運などの輸送手段と，輸送の際の工夫や努力について調べることである．その際，運輸業や倉庫など物流に関わる人々の働きや港湾や空港といった施設などに触れるようにすることも考えられる．」とある．港湾を実際に見学し，働く人に接し，貿易や運輸の役割を考えられる人材の育成が求められている．

一方的な説明とならない広報ツールとして，どういった手法があるかについて考えた．児童をターゲットとすることから，「遊び」の要素を取り入れたツールとすることが有効ではと考え，チーム内でアイデア出しを行った（図 1）．結果，「塗り絵」や「カルタ」，「双六」が提案され，この中からツールとして「カルタ」を採用することとした．「カルタ」を選定した理由は主に2点ある．まず1点目は，競争性である．競争性のあるコンテンツであれば児童たちの興味を誘い熱中してもらうことができると考えられた．

2 点目は，一度に複数の人数で遊べることである．イベントの限られた時間やスペースを有効的に活用するためには，複数の人数で参加できるものが良いと考えた．また，素材やルールは単純明快なものとし，老若男女問わず親しみのある「遊び」を活用すれば，触れやすいものになると考えた．こうした理由から，競争性に欠ける「塗り絵」や時間的制約が大きい「双六」ではなく，年齢的な制約も少ないと考えられる「カルタ」を製作し，これを用いた広報活動に取り組むことに決定した．

図1　プロジェクトチーム打ち合わせの様子

(3) 三河港を材料としたカルタの製作

次に，「カルタ」を製作するにあたり，どういった工夫をしていくかについて考えた．工夫した点は 5 点ある．1 点目は，港湾工事，物流，防災，環境などの港湾に係るコンテンツを知るために，クイズをカルタに融合させた（図 2,表 1）．これは，読み札に書いてあるクイズを聞き，その答えが書いてある取り札を取る，クイズ形式のカルタである．

2 点目は，視覚的に対象物を理解し易いよう，取り札に写真や絵を用いた．使用する写真や絵は，著作権の観点から可能な限り自前で準備することとした．自前で準備することが困難な写真や絵については，商工会議所や観光コンベンション協会などの協力を得て，使用許可をいただいたものを使用することとした．

3 点目は，専門用語（例えば，浚渫，ケーソン）や港湾特有の施設（上屋，防波堤）など一般に馴染みの無い用語は，写真や絵のほか，カルタの読み札の欄外に各用語の詳しい説明を記載し，読み手や取り手がより理解できるように工夫した．

図2　読み札（上）と取り札（下）の例〈ケーソン〉

表1　カルタの札の分類

札の分類	札の数
港の工事・防災に関するもの	8 枚
港の物流業務に関するもの	8 枚
港で取り扱う貨物に関するもの	6 枚
港の賑わいスポットに関するもの	6 枚
港の環境・生物に関するもの	8 枚
港周辺の文化に関するもの	8 枚

4点目は，取り札の裏面に三河港の地図と各単語の対象物が存在する場所を「出現ポイント」として記載した．これは，各用語の対象物が三河港のどのあたりで実際に見ることができるかを記載することで，港湾をより身近に感じてもらうためのものである．

5 点目として，ゲーム性を高めるため，取り札に数字を記載し，取った札の合計点の高さを競えるようにした．

また，製作したカルタは，「三河港 eyeQ カルタ」とネーミングした．名前の「eyeQ」には，目（eye）でしっかり札を見て，問題（Q）の答えの札をとり，IQ（知能指数 Intelligence Quotient の略であるが、ここではあえて三河港に関する理解度と解する）を上げようといった意味を込めたものである．

３．カルタを活用した広報活動

(1) 豊橋みなとフェスティバルでの試行

当初の予定通り「豊橋みなとフェスティバル」にて，完成した「三河港 eyeQ カルタ」を広報ツールとして活用した．当フェスティバルは屋外ブース形式だが，夏場の屋外では暑いこと，港湾エリアでは風が強くカルタの飛散が考えられることなど課題があったため，主催者と調整し，特別に屋内でカルタ会場を設営した．また，カルタをする際に膝や足が痛くならないようマットを用意し，より競争性を高めるため，取り札に記載されている数字を得点とし，獲得した得点に応じて賞状をあげ，褒め称えた．

当フェスティバルには，当日 33,000 人の来場者があり，カルタブースへの来場者も人が途切れること無く盛況に終わった (図 3)．カルタブースでは，カルタ体験に加えて，興味を持った方が家に持ち帰っても遊べるようにと，カルタの配布も行った．来場者からは，「勉強になった」「難しいけど，おもしろかった」，「どこで入手できるか？」など好意的な声が寄せられ，一定の成果が上げられたことが実感できた．

このイベントの結果が良好であったことから，カルタを活用した広報活動を更に展開していくこととした．

図 3　豊橋みなとフェスティバルでの広報活動

(2) 活動の次なる展開

三河港湾事務所では，豊橋みなとフェスティバル以外にも例年参加をしているイベントがあるため，次なる展開としてそれらのイベントで積極的に広報を行った（図 4）．また，カルタが可能なスペースの無いイベントでは，カルタを来場者に配布した．

更に，地域のイベントや小学校の防災授業の一部 (図 5) を活用し，広報を重ねて地元での認知度が高まってきたため，次の段階としてカルタをメインに据えた新規イベントの企画を行った．

(3) 近隣小学校の総合学習への組み込み

これまでの取り組みを踏まえ，児童をメインにしたイベントを企画することとし，三河港の近隣にある豊橋市立牟呂小学校に相談した．学校サイドも職業紹介を授業で取り入れることもあることから，総合学習の時間を活用することとし，前向きに協力していただけた．

今回の対象は，将来の進路を考え始める 6 年生とした[2]．この企画では，より多くの児童が一度に実施することから，これまで用いたハンドサイズのカルタではなく，A3 サイズの大型カルタで体を動かしつつゲームを行うこととした．また，港湾工事を具体的に知ってもらうため，三河港湾事務所が行う港湾工事の受注者で組織された「三河港工

図 4　三河湾大感謝祭での広報活動

図 5　牟呂小学校防災授業での広報活動

事安全連絡協議会」にも協力をいただき，浚渫船を模したクレーンゲーム，タブレットによる港湾工事に関するクイズ，コントローラーを用いた画面内のドローン操作体験など，工事学習会も併催した．

用いるカルタを A3 の大型サイズにすることから，小学校の体育館を会場にした．また，体を動かしてカルタを取るルールとしたことから，ケガ等のトラブルを生じさせないよう万全の体制を整えるべく，事前に生徒の行動心理に詳しい先生方から注意事項等を教示いただいた．加えて，生徒たちにはカルタの一覧をあらかじめ配布し，当日に備えた“予習”をしてきていただいた．

当日は，1 授業につき 1 クラス単位で，生徒 130 人程がカルタを行った．プロジェクト連携先である豊橋市の佐原光一市長も来校され，生徒がカルタに取り組む様子をご覧いただいた．また，“予習”の成果も十分に出ており，読み札を読んだ後は生徒たちが一斉に正解の札へと向かっていく様子も見られた（図 6）．この日の様子は，複数の新聞社や地元ケーブルテレビの取材を受け，記事やニュース番組の特集で報道された（表 2，3）．

このカルタ大会以前までの取り組みとカルタをメインとしたイベントを行った結果，体験人数（表 4）が少しずつ増えており，今後広報ツールとしての役割を果たすことが可能であると考えられる．

図 6　牟呂小学校クイズカルタ大会での広報活動

図 7　牟呂小学校クイズカルタ大会での広報活動（集合写真）

(4) ＨＰによるカルタ製作方法の公開

イベント参加者から，カルタの入手方法を尋ねられることがいくつかあり，広く普及することが課題であると考えた．そこで，三河港湾事務所の HP でカルタをダウンロードできるようにした（図 8）．

HP への掲載にあたって，カルタを家でも手軽に製作できるように，名刺サイズの両面印刷用に作り変えるといった工夫を施した．また，HP での公表にあたっては，記載する内容や著作権の確認等を再度行い，扱いやすいデータの容量への変換など工夫を行った．さらに，HP に訪れた人の目に留まるよう，バナーを作成してカルタ専用ページへリンクができるようにした（図 9）．なお，HP 掲載後には，カルタ大会についての記事を書いて頂いた新聞社から，「三河港 eyeQ カルタ」の製作経緯等を記事にしたいとの申し出があり，カルタ制作の流れや工夫した点，困難だった点などを細かく取り上げていただいた．

表 2　掲載された新聞

掲載日	新聞名	記事タイトル
R2/2/6	中日新聞	三河港の魅力かるたに凝縮
R2/2/6	東愛知新聞	クイズカルタで三河港理解
R2/2/10	マリタイムデーリーニュース	児童向けに「三河港クイズカルタ」
R2/2/19	日本海事新聞	三河港，かるたで学ぶ港の役割．地元小学校でクイズカルタ大会
R2/4/10	日本海事新聞	三河港，クイズカルタ自宅で楽しく．無料ダウンロード版．先生も太鼓判「小学校の教材に最適」

表 3　放送されたテレビ番組

報道日	テレビ会社	番組名
R2/2/11	ティーズ	[ティーズ]HOT ステーション

表 4　イベントとカルタ体験人数

開催日	イベント名	カルタ体験人数
R1/7/15	豊橋みなとフェスティバル	約 100 人
R1/10/20	三河湾大感謝祭	約 30 人
R1/11/10	牟呂小学校防災授業	約 130 人
R2/2/5	牟呂小学校クイズカルタ大会	約 130 人

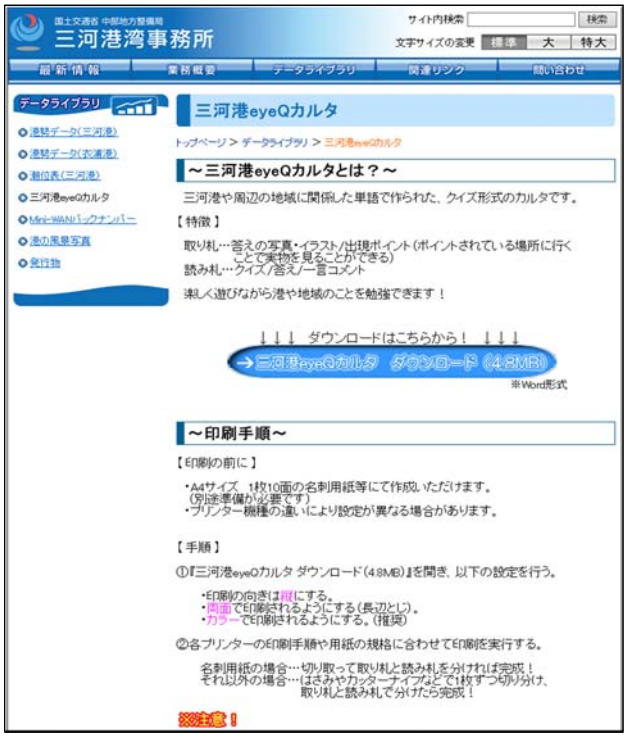

図8　三河港 eyeQ カルタ専用ページ

図9　三河港 eyeQ カルタバナー

4．活動を振り返って

実際にカルタを様々なイベントで運用し，児童は楽しんで体験する様子が非常に多く見られた．また，一緒に来た保護者の方も参加した際には，児童と熱心に札を取り合う様子が見られた．

これまでの活動を通して，たくさんの児童や大人から多くの感想をいただいた．以下に、担当者が無作為に参加者から聞き取った感想を列記する．

1）カルタを体験した児童からは，「難しかったけれど，面白かった」，「はじめはほとんどわからない単語ばかりだったけれど，やっているうちに覚えられたのでよかった」といった感想が多かった．

2）保護者の方や学校の先生などの大人からは，「内容が難しく，児童と同じように熱中した」，「大人でも知らないような単語ばかりだが，児童は楽しく遊びながら勉強できているようで良かった」，「読み札の文章が少し難しかった」という感想が多かった．

このように，総じて世代を問わず「楽しく遊べて，港湾に関する勉強もできた」 という評価であったことから，当初掲げた目標，「児童が楽しく学べる参加型の広報」の確立は概ね達成できたものと考えている．

5．最後に

今回のプロジェクトを通じて，事務所における新たな広報活動の展開を見出すことができた．普段は，若手職員主導で業務を進める機会は少ないが，企画検討から実施に至るまでの全てを自分たちの手で行い，非常に”やりがい”を感じることができた．カルタ製作の過程では，色々と苦労も多かったが，多くの方々から好評をいただけて，大変有意義であった．

一方で，今回のプロジェクトを通じて，港湾工事，物流，防災，環境など港湾に係るコンテンツの広報を行う際には，馴染みのない人が見ても分かりやすい写真の選定や文章の表現を強く意識することが重要であり，伝える側の意識の向上が一層必要であると感じられた．また，これまでのイベントが三河港の周辺に限られてきていることから，より広範囲の他機関との連携が必要であると感じられた．

そこで，今後の活動としては，より分かりやすいカルタとするため，「三河港 eyeQ カルタ 2.0」に更新するとともに，地元市役所の協力のもと地元広報誌への掲載を試みる予定である．

最後に，近年は少子高齢化の影響で，担い手不足が顕在化し，多くの業界が労働者の確保について問題としている[3]．港湾を取り巻く環境も例外では無く，より多くの児童に港湾へ興味をもってもらうことは，港湾を支える将来の人材育成，応援団づくりにも繋がる可能性があると考えている[4]．今後も，伝える側の意識を向上させつつ，経済活動の基盤である港湾の魅力的な広報活動に取り組んで参りたい．

謝辞：「三河港 eyeQ カルタ」に関する活動は，製作段階から実施に至るまで多くの関係者の方々からご協力を賜りました．カルタに使用した写真をご提供いただいた豊橋商工会議所様，蒲郡商工会議所様，日本ジュースターミナル（株）様，また，総合学習の授業で活用いただいた牟呂小学校の先生方，そして工事学習会としてご協力いただいた三河港工事安全連絡協議会の皆様など，大変多くの方からご助力いただきました．ご協力いただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく，謝辞にかえさせていただきます．

参考文献

1）文部科学省：小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　総合的な学習の時間編, 2017

2）文部科学省：小学校キャリア教育の手引き<改訂版>, 2011

3）内閣府：日本経済 2019-2020－人口減少時代の持続的な成長に向けて－, 2020

4）厚生労働省：第 37 回労働政策審議会職業安定分科会雇用対策基本問題部会港湾労働専門委員会　参考資料-1, 2019